

こんなところにハリスギゴケが

(川崎市岡本太郎美術館屋上)

平岡照代*・平岡正三郎*

1. はじめに

筆者らは2000年3月、自然ガイドブックNo.11「生田緑地のコケ」を発表するにあたり、生田緑地内をくまなく調査し、117種類の蘚苔類(コケ)の生育を確認、記録した。その3年後、2003年11月19日に岡本太郎美術館屋上に緑化目的で植栽されたコケの生育状況を調べる機会を得た。その結果、上記ガイドブックの巻末リストに追加すべき新しい2種のコケを確認したので報告する。

開館当初、美術館の屋上にはエゾスナゴケ *Racomitrium japonicum* 1種類が植栽されたコケのマット(30cm×60cm)が一面に敷き詰められ、ところどころに散水用のスプリンクラーが設置されていた。現在、コケの生育状態は全体的にはあまり良いとは言えないが、スプリンクラーで十分灌水されている範囲にはまとまったコケの群落が生育している。最初に植栽されたエゾスナゴケの群落では、胞子体を着けたものや、一部にギンゴケ *Bryum argenteum* やホソウリゴケ *Brachymenium exile* が混生したもの等が見られる。ギンゴケやホソウリゴケは生田緑地周辺の人家付近などにごく普通にみられる種であり、施工後に侵入したものと考えられる。屋上全体で最も広範囲に繁殖しているのはこれらエゾスナゴケを主体とした群落である。他に数カ所、エゾスナゴケの群落が衰弱、消失した跡に、生田緑地内では新顔のウマスギゴケ *Polytrichum commune* やハリスギゴケ *P. piliferum* の群落が出現しているのが確認された。この2種のスギゴケ類の侵入経路については断定はできないが、国内の分布や生態を考慮すればエゾスナゴケの栽培地、北海道千歳市郊外の圃場で混入した胞子や幼植物が植栽後に発芽、生育したと推察することが可能である。ウマスギゴケはオオスギゴケ *P. formosum* とならんで日本庭園(コケ庭)によく利用されるおなじみのコケである。日本全国の低地から高山の、明るく湿った場所に普通に見られる。自然界とは異なる建造物の美術館屋上であっても、日照や水分条件が整えば生育が困難とは言えないようである。

一方ハリスギゴケは北方系のコケで、特に関東以南では高地に生育する種である。偶然の結果、人為的に移入したものであろうが、関東地方で標高100m未満の都市近郊の緑地公園内で生育が観察されたのは珍しい。雄株、雌株それぞれの群落があり、胞子体を着け、さらに群落を拡大する可能性がある。生田緑地内の珍しいコケとしての話題性もあり、以下に紹介する。

2. ハリスギゴケ(スギゴケ科スギゴケ属)

形状：茎の高さは普通2-3cmであるが、今回見つかったものは2cm弱でやや小型である。ほとんど枝分かれしないで、葉は茎の上部に集まって着く。他のスギゴケとの明瞭な区別点は葉の先端に透明で長い(葉身の約1/2の長さ)芒を持つことである(図1)。肉眼でも葉先が白く見える(写真1)。雌雄異株。雄株は赤味がかった包葉が花びら状に集まって着く(写真2)。胞子体は雌株に頂生する(写真3)。

生態：高地の日当たりの良い岩上や砂の上に生育する。

分布：国内では北海道の低地から、中部日本の標高の高い場所と比較的普通に見られる。分布の南限に近い近畿地方では大阪府(780m, Mt.Kenbi)、三重県(677m, Mt.Shakujou)が例外的に低地での記録である。神奈川県では古い記録に箱根一双子(1972年)があるが、標本の所在が不明で、2003年11月現在未確認である。西丹沢(用木沢650m)では1997年にわずかながら生育が報告されたが、この生育地は現在消失している。従って今回の岡本太郎美術館屋上(生田緑地)が県内唯一のハリスギゴケの生育地となる。

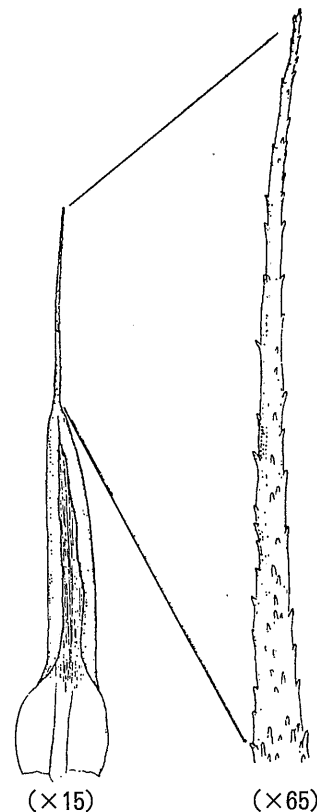


図1 葉と芒 OSada (1966) より

* 財団法人平岡環境科学研究所

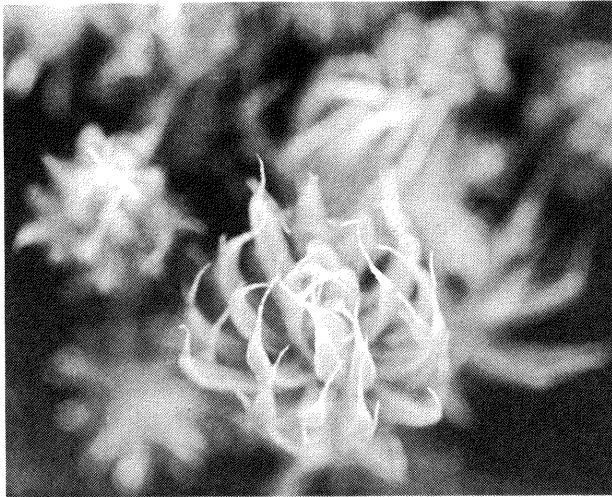


写真1 葉先が白く見える

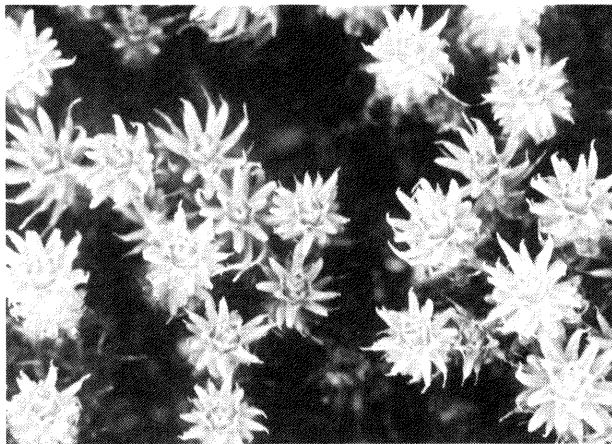


写真2 雄株の群落 中心部分の包葉が赤い



写真3 まだ若い胞子体 帽をかぶっている

3. 美術館屋上におけるハリスギゴケの

発生と生育課程

1998年10月に岡本太郎美術館屋上に定植されたエゾスナゴケのマットは北海道の圃場で2-3年間栽培されていたもので、このコケは乾燥と日射に強く、冬季の凍結にも耐え、水分条件が整えば、屋上緑化の用途に適している。ハリスギゴケは国内の分布状況から見て自然繁殖とは考え難く、北海道からの出荷時にはエゾスナゴケのマット内にすでに混入していたものと推測される。美術館は1999年4月に開館し、屋上のコケはその前年の10月に定植以来、5年が経過している。その間の水やりを含む屋上の気象条件が一部の場所ではエゾスナゴケよりむしろハリスギゴケの方に適していたものと考えられる。混入していた孢子あるいは幼株は順調に発芽、生育し、現在見られる雄株、雌株の集団を作ったと推察される。

4. 分布上の意義

ハリスギゴケはその分布から知られるように、北海道や中部日本の高地など、夏期の厳しい日射や冬季の寒気、強風や乾燥に耐えて生活している。こうした性質が美術館の屋上に自然界に類似した生活環境を見だし、現在見られるハリスギゴケ群落を形成出来たのであろう。人工的な植栽の副産物ではあるが、発生(定植時と考える)以来5年で立派に孢子体を着け、盛んに繁殖している現状は、ある意味でもう一つの自然と見なしてよいのではないだろうか。今後、美術館および生田緑地関係者による適切な水やりと周辺の林の保護、管理により、この貴重なハリスギゴケの群落が健全に生育し続けることを願ってやまない。

参考文献

- 1) 平岡正三郎他, 2000. 生田緑地のコケ. 川崎市青少年科学館, 神奈川県.
- 2) Osada, T., 1966. Japanese Polytrichaceae. II. , Oligotrichum, Bartramiopsis and Atrichum and Phytogeography. Journ.Hattori Bot. Lab.,(29): 1-50.
- 3) Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. Hattori Bot. Lab.
- 4) 平岡照代, 磯野寿美子, 田邊光夫, 2002. 神奈川県産蘚苔類チェックリスト. : 神奈川自然誌資料, (23):65-76
- 5) 岩月善之助編, 2001. 日本の野生植物, コケ. 平凡社.

謝辞

調査に当たり御協力下さいました川崎市岡本太郎美術館, および有限会社ゼルグプランニングの安齊唯夫氏に深く感謝します。

* 財団法人平岡環境科学研究所